福島県文化財調査報告書第68集

福島県塩川町

上ノ台遺跡

発掘調査概報

1978年 12月

福島県教育委員会
塩川町教育委員会

福島県文化財調査報告書第68集

福島県塩川町

上ノ台遺跡

発掘調査概報

1978年 12月

福島県教育委員会
塩川町教育委員会

序　　文

会津地方には、国史跡の慧日寺跡をはじめとして数多くの文化財があり、先人の尊い業績にふれることができます。

このたび、雄国山麓開拓事業の施行中に新しい埋蔵文化財包蔵地が発見されました。その後保存のための協議を重ねて参りましたが現状保存が困難となったので、記録保存のための発掘調査を実施いたしました。

本冊子はこの調査の概要をまとめたものですが、文化財の保護、そして学術研究の資料として御活用願えれば幸いです。

最後になりましたが、本調査のために何かと御援助下さった関係諸機関の皆様に心よりお礼申し上げます。

昭和53月12月

福島県教育委員会

教育長　辺　見　栄之助

目　　次

序　　文

例　　言

第１章　はじめに……1

第２章　遺跡の位置と周辺の遺跡……2

第３章　調査経過……2

第４章　遺　　構……3

　第１節　第１号住居跡……4

　第２節　第２号住居炉跡……6

第５章　遺　　物……6

　第１節　縄文時代前期の土器……6

　第２節　縄文時代中期の土器……7

第６章　ま と め……8

例　　言

1.本冊子は福島県耶麻郡塩川町大字中屋沢字上ノ台に所在する上ノ台遺跡の発掘調査概報である。

2.上ノ台遺跡は雄国山麓開拓事業の工事中に発見され、保存協議を重ねたが現状保存が困難のため緊急に発掘調査を行った。

3.調査期間は昭和53年9月4日～10日(7日間)である。

4.発掘調査の組織は以下の通りである。

発掘主体者　福島県教育委員会

発掘協力機関　塩川町教育委員会（教育長・一重佐代二）

発掘担当者　福島県教育庁文化課

文化財主査・生江芳徳　　文化財主事・日下部善己

発掘調査員　塩川町公民館々長・大河原栄喜

塩川町文化財調査委員・中川伝吾、栗村銀造、湯浅恒憲、花見栄

慶徳周、矢吹俊穎、山田茂男、木村久男

発掘協力者　塩川町郷土史研究会々員

雄国山麓開拓建設事業所

5.本冊子は、発掘調査後、短期間でまとめたため、出土遺物については、縄文土器の一部についてのみ紹介した。なお、資料は塩川町公民館が保管している。

6.本冊子の執筆・編集は、生江芳徳・日下部善己の両名が担当し、その文責は文末に示した。

挿図目次

第1図　上ノ台遺跡の位置と周辺の遺跡……1

第2図　上ノ台遺跡トレンチ配置図……3

第3図　第1号住居跡……5

第4図　第2号住居炉跡……6

図版目次

図版1　1．上ノ台遺跡全景

2．第1号住居跡

図版2　1．第1号住居跡の周溝

2．第2号住居炉跡

3．第2号住居床面出土の土器

図版3　縄文時代前期の土器

図版4　縄文時代前期の土器

図版5　縄文時代前期の土器

図版6　縄文時代前期の土器

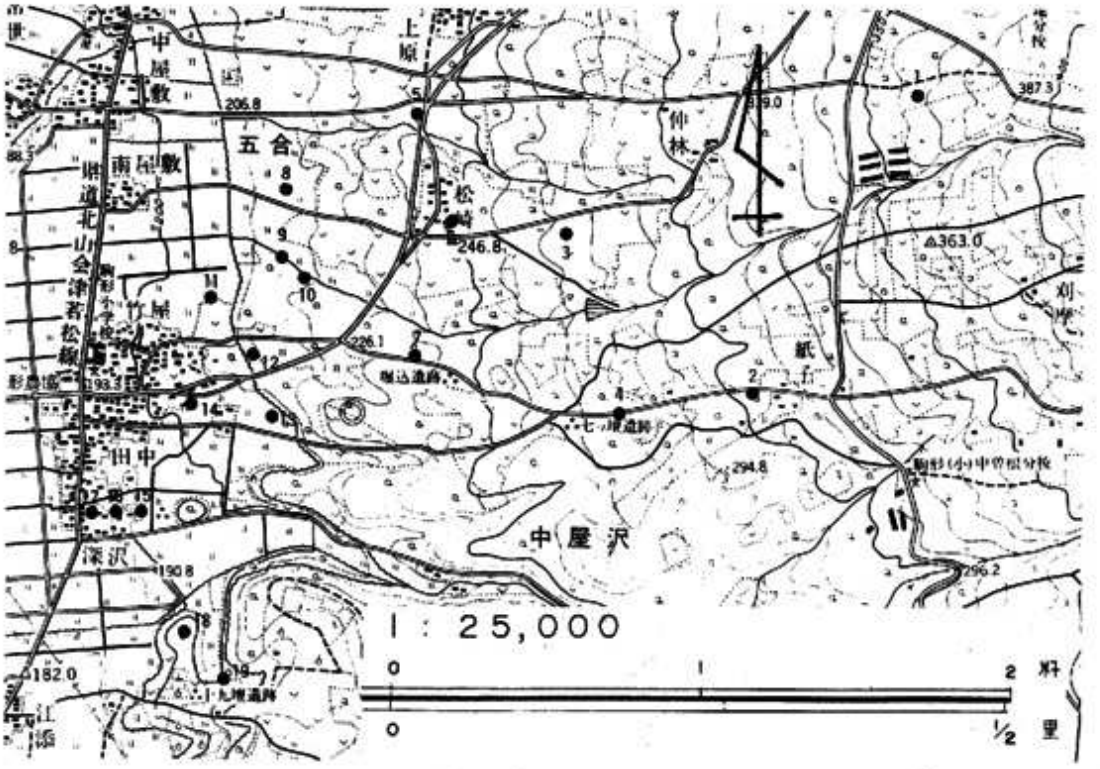
図版7　縄文時代中期の土器

図版8　縄文時代中期の土器

第1章　はじめに

雄国山麓の農用地造成である雄国国営パイロット事業が開始されてすでに8年になる。この事業に先立ち県教育委員会、該当1市1町1村（喜多方市、塩川町、北塩原村）、東北農政局の3者は埋蔵文化財保護についてすでに協議を行い、保護対策は講ぜられてきた。しかし雄国山麓は山林が大部分を占め、事業の進行中に新たに発見される遺跡がある。昭和51年5月には喜多方市熊倉町都字輪具に工事中古墳が発見され、緊急に発掘調査が行われた。上ノ台遺跡も昭和53年8月に工事中、耶麻郡塩川町大字中屋沢字上ノ台に新たに発見された遺跡である（第1図）。

9月4～10日の7日間緊急調査を行ったところ、縄文中期の石囲炉1基、土師器を伴う竪穴住居跡1棟が検出された。また出土した遺物の中には縄文時代前期末～中期初頭にかけての土器片が多く含まれており、会津地方にとっては遺構、遺物とも貴重なものと考えられるので、検出された遺構と縄文時代前期～中期初頭の土器片を中心に報告しておきたい。



第1図　上ノ台遺跡（◎印）の位置と周辺の遺跡

1．中道地遺跡　2．前山古墳群　3．南原遺跡　4．七ツ壇遺跡　5．狐壇古墳群　6．松崎古墳群　7．堀込遺跡　8．前畑古墳　9．明蓮寺遺跡　10．明蓮寺　11．茶臼森　12．竹屋古墳群　13．藤権現遺跡　14．田中船森古墳　15．深沢古墳　16．深沢手塚館　17．深沢宝篋印塔　18．深沢前山古墳群　19．十九壇古墳群

第２章　遺跡の位置と周辺の遺跡

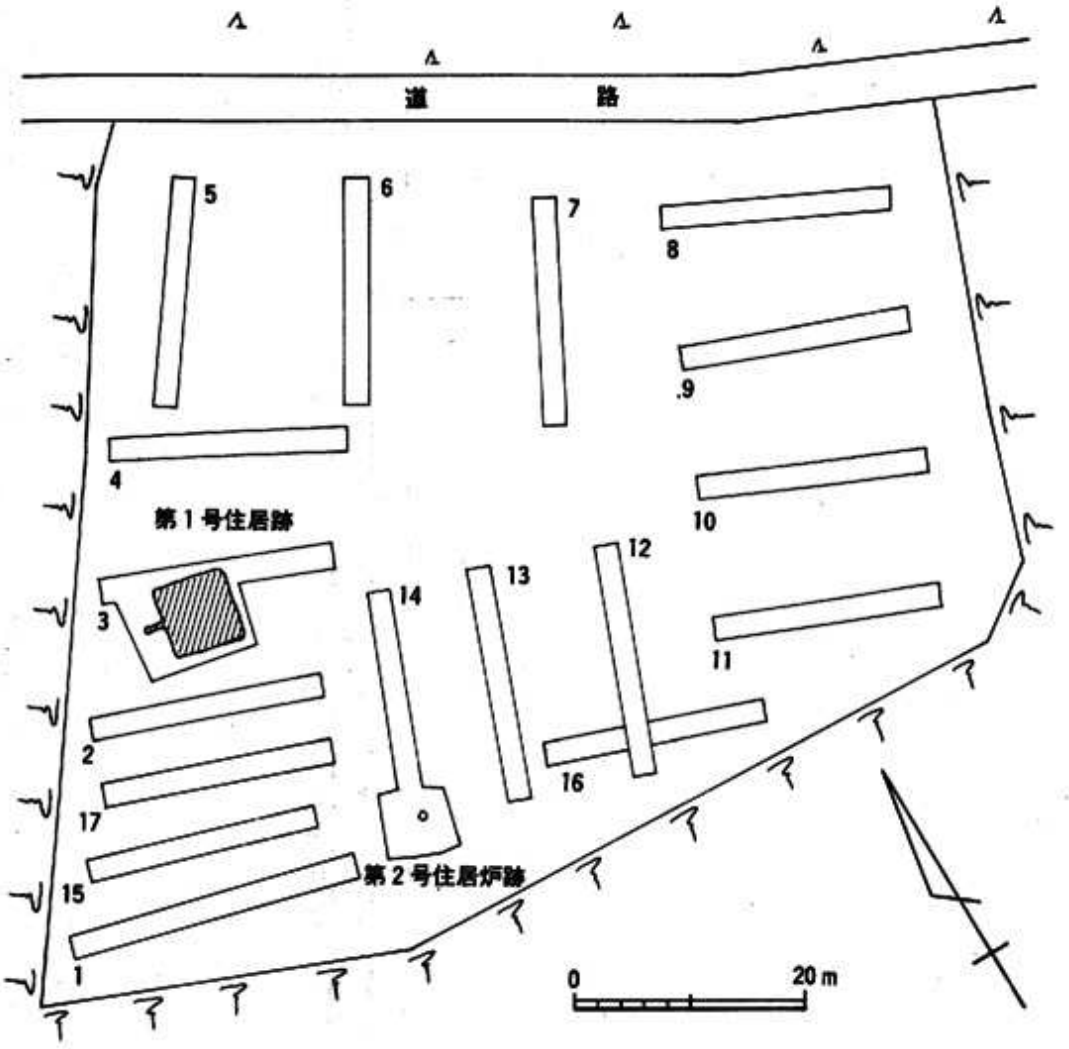
上ノ台遺跡は前述の通り福島県耶麻郡塩川町大字中屋沢字上ノ台に新たに発見された遺跡である。この遺跡は標高230m前後の雄国山麓に営まれている。雄国山麓とは会津盆地の東北部の雄国山系西麓一帯を称し、行政的には大部分喜多方市、塩川町に属している。この山麓は雄国山の噴火により形成されたところで、会津地方においては猪苗代町の磐梯山麓と並び縄文時代の遺跡を最も多く包蔵する地域である。上ノ台遺跡の北方約２kmには縄文早期後半の標式遺跡となった常世遺跡（原田遺跡の一部）が、縄文中期の遺跡としては上ノ台遺跡の北東隣りの掘込遺跡と東方約３kmの大原遺跡があげられる。また常世遺跡の北方約２kmのところには縄文時代後期から晩期にかけて営まれた森台遺跡がある。弥生時代の遺跡は現在のところ五軒丁遺跡と羽黒森遺跡のわずかに２遺跡が確認されているだけであるが次の古墳時代には山麓の末端部に多くの古墳が築造された。上ノ台遺跡の西方わずか0.5kmには深沢の前方後円墳が、南方1kmのところには十九壇古墳群がありそのうちの１基は前方後方墳を含み、発掘調査の結果５世紀初頭を下らない古式古墳であった。このように雄国山麓は会津地方にとっては考古学資料の宝庫となっている。

第3章　調 査 経 過

８月17日県教育庁文化課に、塩川町田中部落東側の丘陵をブルトーザーで削平したところ、土器片の散布がみられるとの由、連絡が入った。文化課では直ちに塩川町教育委員会に確認を依頼したところ、現地はすでに地山までに掘下げられており、ところどころに土器片が散在しているとのことである。

８月25日文化課では生江を現地に派遣し、この新発見の遺跡の取扱いについて、塩川町教育長一重佐代二氏、同町公民館長大川栄喜氏、同町文化財調査委員長中川伝吾氏はじめ委員の方々、雄国山麓開拓建設事業所工事課長伊藤順一氏はじめ事務所の方々と協議を行った。遺跡は最も削平されたところでは地山を４ｍ以上も掘下げられており、すでに大部分は破壊されたと考えられるが、なお遺構の残存の可能性もある約5,000㎡ほどのところを大至急遺構確認のための試掘を行うことになった。雄国山麓開拓事業は２市町村以上にまたがるもので文化課が発掘主体となり、緊急のため塩川町当局には多大の援助をいただくことになった。なお発掘担当者には文化課生江芳徳、日下部善己の両名が、調査の補助に大川原栄喜ほか町教育委員会の方々、中川伝吾氏をはじめ町文化財調査委員の方々があたった。作業員としては町郷土史研究会の方々の協力を得た。

試掘は最初９月４～８日までの５日間を予定した。２ｍ×20mの14本のトレンチにより遺構の確認を試みたが２号～10号トレンチはすでに地山まで削平されていたため３日間で予定の14本のトレンチを完掘した。しかし３号トレンチに落ち込みが、14号トレンチには石囲炉跡が認められたのでそれぞれ拡張したところ３号トレンチの落ち込みは方形の竪穴住居跡であることが判明した。１号トレンチと２号トレンチの間にも遺構の存在が予想されるので15・17号の２本のトレンチを入れたが遺構は検



第2図　上ノ台遺跡トレンチ配置図

出できなかった。また14号トレンチの石囲炉跡の残存から更に16号トレンチを入れたがこれにも遺構は検出できなかった。遺跡の中心部は地形から考えてすでに3～4mも削平された西側、南側にあったと推測されるので試掘によって確認した竪穴住居跡1棟と石囲炉跡1基を調査し、更に散在している土器片を表採し調査を終了した。なお調査期間も2日ほど延長し9月4～10日までの7日間となった。(第2図)　　(生江芳徳)

第4章　遺　　構

本遺跡の調査によって確認された遺構は、竪穴住居跡1棟、住居炉跡1基である。以下その概要について記述する。

第1節　第1号住居跡（第3図）

本遺跡の残存地区の西側に設定した3号トレンチ内に黒色の落ち込みを検出し拡張した結果、煙道を有する竪穴住居跡であることを確認した。この住居跡の南方20mには第2号住居炉跡がある。

この住居跡は、ローム層を掘り込んで構築した東西6.55m、南北6.50m、面積約42.58m²の正方形プランを呈し、煙道、カマド、周溝、柱穴を有する。

竪穴内の堆積土は黒色土1層のみでその厚さは10～15cmほどであり、土中からは土師器(内黒など)の小片が若干出土している。これらはいずれも磨滅の著しいものがほとんどである。

壁の高さは13cmほどで床面とほぼ直交し、造りはたいへん良い。本来の壁高は現在高より高かったようであり、後世の耕作などによって上部は削平されたものと考えられる。

床面は多少の凸凹があるが比較的平担で固く締まっている。床面の北側半分は赤橙色のロームを貼り付けた可能性がある。床面上からも土師器の小片が若干出土した。

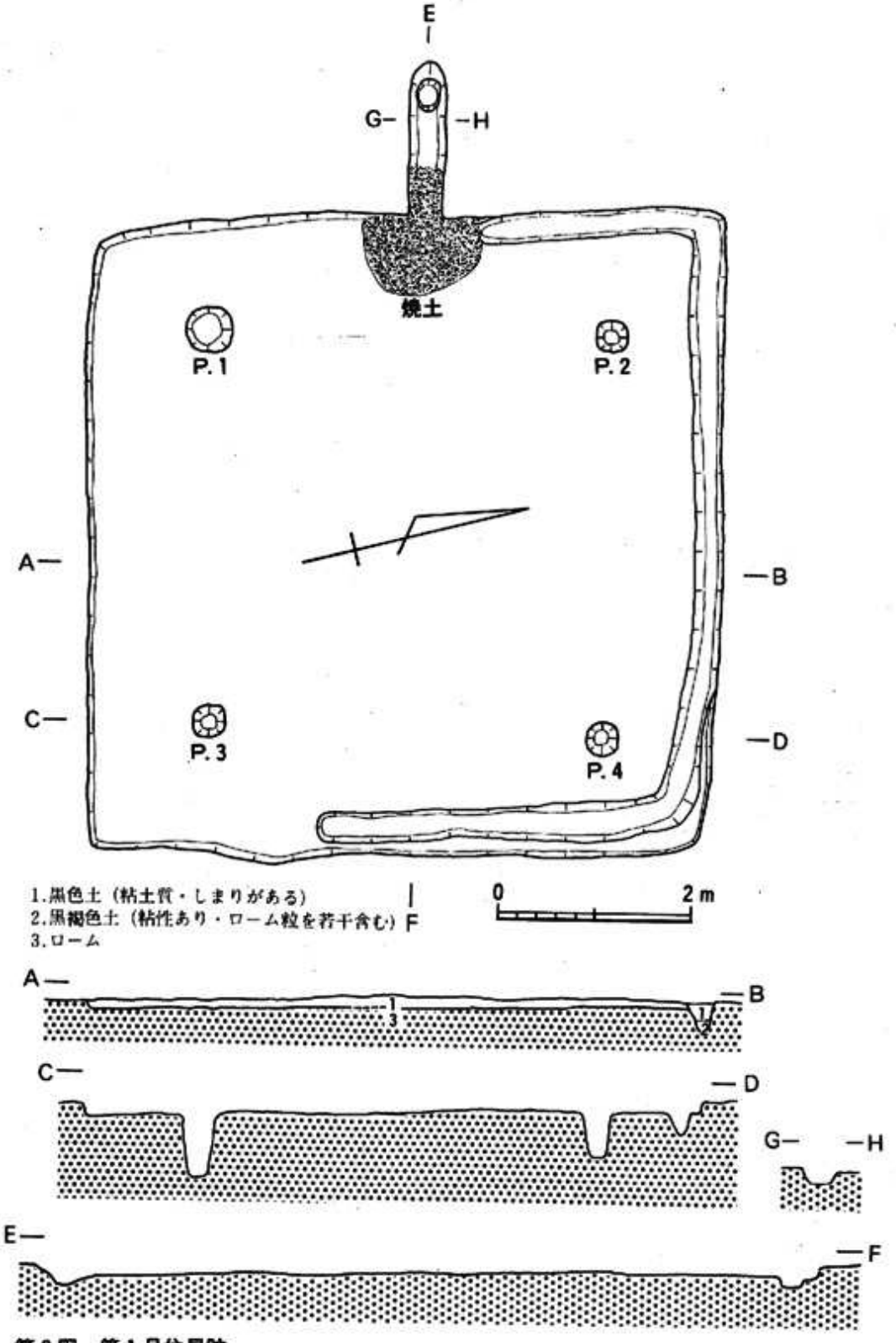
カマドは住居の西辺中央部に構築されていたようであるが破壊が著しく赤褐色の焼土、木炭片のみが残っている。その範囲は径1.2mほどの半円形内であり、その中にはカマドの袖の支えかと思われる平石が残っている。カマドより西方へ幅35cm、深さ12cm、長さ1.6mの煙道が伸びている。煙道の三分の一ほどは加熱によって赤褐色を呈し焼土も堆積していた。遺物は発見されなかった。

周溝は住居の北半部の壁際にのみ認められた。カマドから右回りに住居の東辺三分の二ほどまで連続しており、北壁付近では幅27cm、深さ30cmほどであるが、東壁付近では幅26cm、深さ10cmほどになっている。周構内の堆積土は上層（黒色土層)、下層（黒褐色土層）に分けられ、住居埋没時に若干の時間的ずれが感じられる。

柱穴と考えられるピットは住居の四隅に各1本ずつ計4本確認された。以下に径、深さ、形、堆積土の順で記述しておく。P.1（48cm、約30cm、摺鉢形、黄褐色土）P.2（35cm、約45cm、円筒形、黒色土）P.3（35cm、63cm、円筒形、褐色土）P.4（38cm、45cm、円筒状、黒色土)。P.1を柱穴とするには若干の疑念もあるが一応4本柱と考えたい。また柱穴内堆積土のようすから本住居の埋没については、北半部と南半部では差がありそうである。

本住居内では貯蔵穴と考えられるものは検出できなかった。一方、煙道の西に南北に走る小溝があるが性格は不明であった。

以上住居跡の調査所見を記述して来たが、本遺構内で発見された遺物は土師器の小片若干であり正確な時期を決定しにくい。即ち遺構の年代についても同様である。ただ、煙道や周辺出土の土器片などの検討によって、より正確な時期に迫ることも可能ではあろうが、遺物整理途中の現段階では本住居跡の時期は土師器の使用された時期としておかざるを得ない。なお、1m以上の煙道を持つ住居跡としては会津地方初の発見であろう。

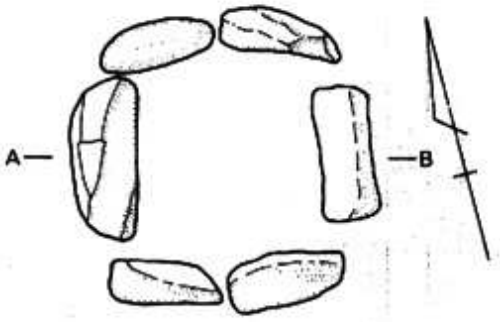

E
G
H
焼土
P.1
P.2
P.3
P.4
A
B
C
D
1.黒色土（粘土質・しまりがある）
2.黒褐色土（粘性あり・ローム粒を若干含む）
3.ローム
F
0
2m
A
B
C
D
G
H
E
F

第3図　第1号住居跡

第2節　第2号住居炉跡（第4図）

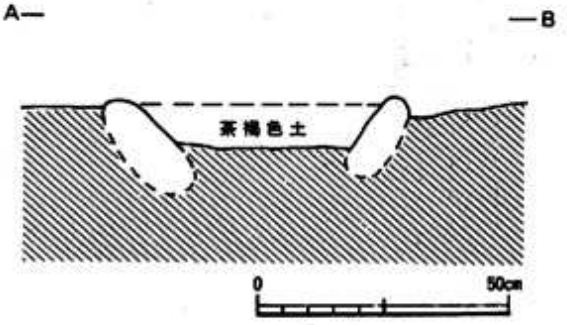
南斜面に設定した14号トレンチで石囲炉を確認しこれを第2号住居炉跡と名付けた。住居跡としてのプラン、柱穴、周溝などは確認できなかったが、炉跡は第1層（黒色土）下の第2層(茶褐色土)で確認された。

床面は固く平担である。炉の西方2mほどの床面上に横位の深鉢形土器を検出した。これは縄文時代中期（大木8a式期）の土器と考えられる。



炉はローム層を掘り込み、約23cm～33cmの河原石を6ヶ配置している。径は、東西62cm、南北61cmで方形の石囲炉である。焼土は十分確認できなかったが炉石には加熱のあとがかなり認められた。

この炉跡が活用されたのは床面出土の土器の時期（大木8a式期）と思われる。この時期の炉跡も会津地方では初めての報告であろうし貴重な例となろう。(日下部善己)



第4図　第2号住居炉跡

第5章　遺　物

出土遺物としては縄文時代前期初頭から中期末にかけての土器と石器類、また時代は下って古墳時代前期の土師器や古式と考えられる若干の須恵器が検出されている。今回は前述のように縄文時代前期末から中期初頭にかけての土器を中心に紹介しておこう。なお遺跡はブルドーザーによりほとんどが破壊されており、遺物も大部分は表採したもので遺物の出土状態あるいは層位も不明である。

第1節　縄文時代前期の土器

(1)　花積下層式相当（図版3・1～5）

1、2、4は刻目と縄の圧痕で文様を描いている。3、5は羽状縄文が施されている。

(2)　大木5式相当（図版3・6～24）

6～10は細い粘土紐を2本1組として連続山形状に横位あるいは縦位に貼付している。この貼付紐は大木4式が小波状なのに対して大木5式では鋸歯状のものとなっている。11、12は口唇部が比較的肥厚でその部分に連続山形文が施されており、13は口唇部に鋸歯状の切込みがある。14・16～19、21には鋸歯状沈線が施されている。20は鋸歯状文というより凹弧線といわれるもので、あるいは大木6式相当のものであるかもしれない。22は斜位につけられた梯子状文か格子目状の沈線文と考えられる。23、24は爪形文が施されており、この文様は次の大木6式相当にひんぱんにみられるようになる。

(3) 大木6式相当（？）（図版4・1～5）

半截竹管の沈線の間に同じ半截竹管の端で爪形文を施している。

(4) 興津式相当（図版4・6～13）

興津式にみられるような貝殻文か刺突文が施されている。

(5) 大木6式相当（図版4・14～16、図版5・1～10、図版6・1～15）

図版4・14～16は鉢の同一個体分である。高さは19cm、口径16cmで口縁部は一部波状になっており、口縁部近くと口縁部下には細い隆帯上に半截竹管の端を利用し爪形状の刺突もしくは刻目が、また体部には細い結節の回転文が施されている。

図版5・1，3は同一個体で口縁部は波状を呈し、一部に直線的な細い粘土紐の貼付が、体部には結節の回転文が施され、口縁部と体部との文様は明確に識別できる。2、4、7は口縁部に2段に刻目がある。5、6はいわゆるみみず張れ状粘土紐に連続爪形文が施されている。

図版6・1～7は同一個体で口縁部はゆるい波状をなし、口縁部から体部にかけて山形、あるいは渦巻状に連続爪形文が、3、7のように一部には逆C形の爪形文が施されている。8、12は口縁部近くに連続爪形文、10、11は半截竹管などによる沈線文、13は比較的細い2本1組の渦巻文、14は口縁部に指頭様の圧痕がそれぞれ施されている。15はボタン状貼付文や半截竹管文、刺突文、結節の回転が施されている。

第2節　縄文時代中期の土器

(1) 大木7a式相当（図版7・1～15）

ほとんどに金雲母が含まれている。1～5・7は口縁部に上下交互に細い半截竹管の端で半肉彫的な鋸歯文を表現しており、いわゆる五領ヶ台式の特徴を有し、3、7の口縁部には瘤状の突起がある。8は半截竹管による平行線を縦に数条引き、平行沈線間には半截竹管による爪形文が施されている。9は口縁部に2段の隆帯をもち、そこに縄文を施し、体部は沈線により方形に区画し、刻目、縄文を施している。10～12は同一個体の体部と考えられるもので、縦に走る結節の回転がみられる。13は北陸地方の新崎式に酷似する破片である。

(2) 大木7b式相当（図版8・1～7）

全部に金雲母を含み、阿玉台式の特徴である隆線を有し、この隆線に沿って半截竹管の端を用い2～3条の爪形文が施されているものもある。なお8a式との中間的な資料もこれに含めてある。

(3) 大木8a式相当（図版8・7～13）

8～13は2号住居石囲炉の近くより出土した同一個体分の土器である。粘土紐が貼付けられている。

第6章　ま　と　め

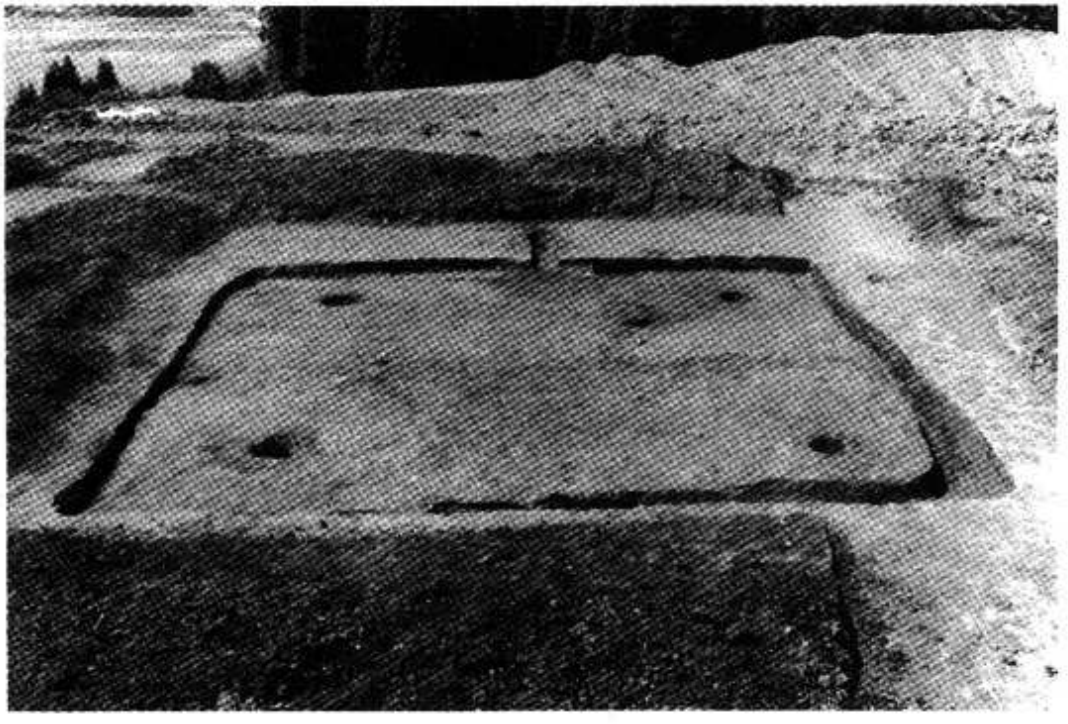
工事中の発見のため遺跡はほとんど破壊されていたが縄文時代中期（大木8ａ式期相当）の石囲炉は会津地方にとって最初のものである。また土師器を伴う竪穴住居跡は浜通り、中通り地方においては何百棟も調査されているが、会津地方においては昭和53年に調査された河東町南原遺跡でわずかに2棟が検出されただけであり、1ｍを越えるような煙道を有するものは今回がはじめてである。

ところで会津地方において縄文時代前期末の土器を出土した遺跡は塩川町刈摩山遺跡（福島考古・1978)、大沼郡新鶴村田子畑遺跡、南会津郡田島町永田遺跡（福島県史第6巻・1964)、わずかに数点の土器片が確認されている耶麻郡磐梯町東新田場遺跡（磐梯町の縄紋土器・1976)、河沼郡会津坂下町上の山遺跡（上の山遺跡・1974)、耶麻郡猪苗代町くるみ沢遺跡（筆者発見）等、きわめて少数の例が知られているにすぎない。またこれらの遺跡から出土した縄文時代前期末の土器もきわめて少量である。これらに比べ上ノ台遺跡から出土した土器は現在まで発見されている会津地方の縄文時代前期末土器の総数量を越える量となった。管見に入った報告書によれば、福島県内でも縄文時代前期末の土器を出土した遺跡は少く、原町市宮平遺跡、石川郡玉川村原作田遺跡、双葉郡浪江町清水遺跡（福島県史第6巻・第1巻・1964・1969)、相馬郡小高町宮田貝塚、浦尻北原貝塚、浦尻台の前・蒲迫遺跡（小高町史・1976・福島考古・1970）富岡町本町遺跡(馬目順一、1978)等にすぎない。このように上ノ台遺跡出土の縄文時代前期末の土器は会津地方ばかりでなく、県内の同時期の貴重な研究資料となろう。

調査後わずかの期間でまとめたために限られた遺物について紹介し、また遺物の実測図・拓本などは掲載できなかった。

おわりになったが発掘調査に協力を願った塩川町文化財調査委員の方々、同町郷土史研究会員の方々、また土器の整理、写真撮影等に御指導いただいた中村五郎、藤崎富雄、星将一、芳賀英一の各氏、御助言をいただいた菅原文也氏には記して深謝の意を表するものである。　（生江芳徳）

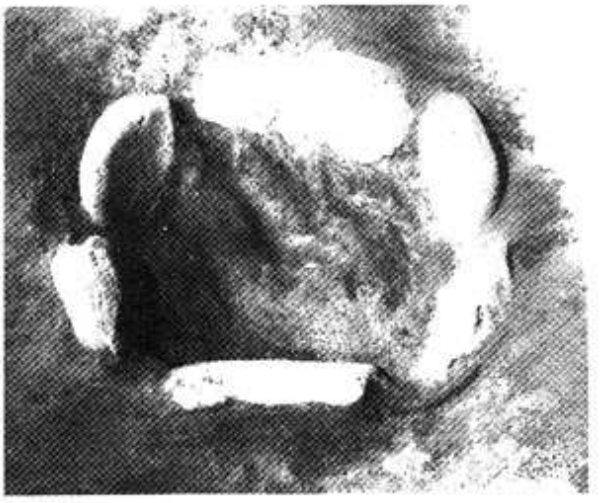
1．上ノ台遺跡遠景



2．第1号住居跡

図版1

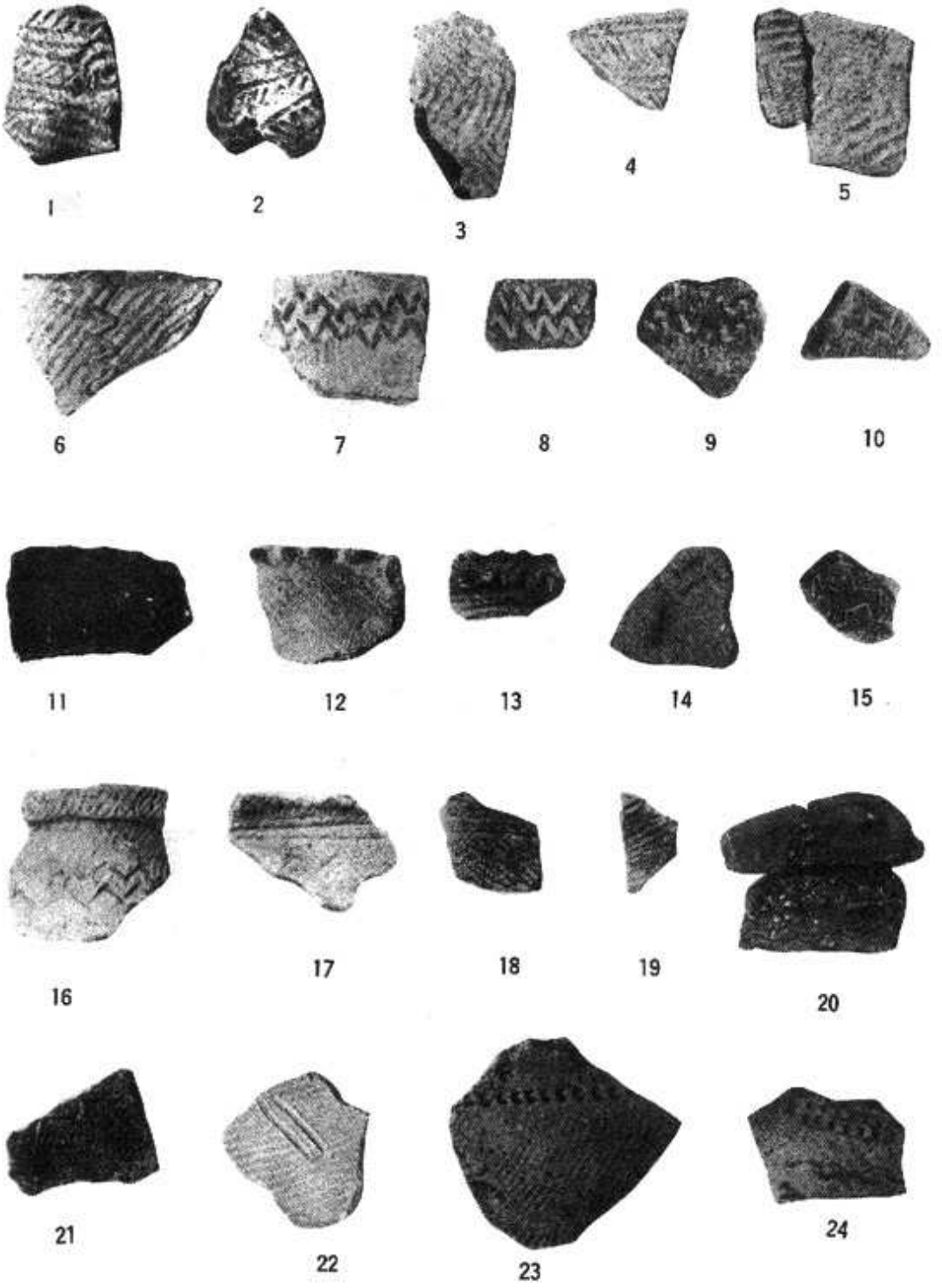
1．第１号住居跡の周溝



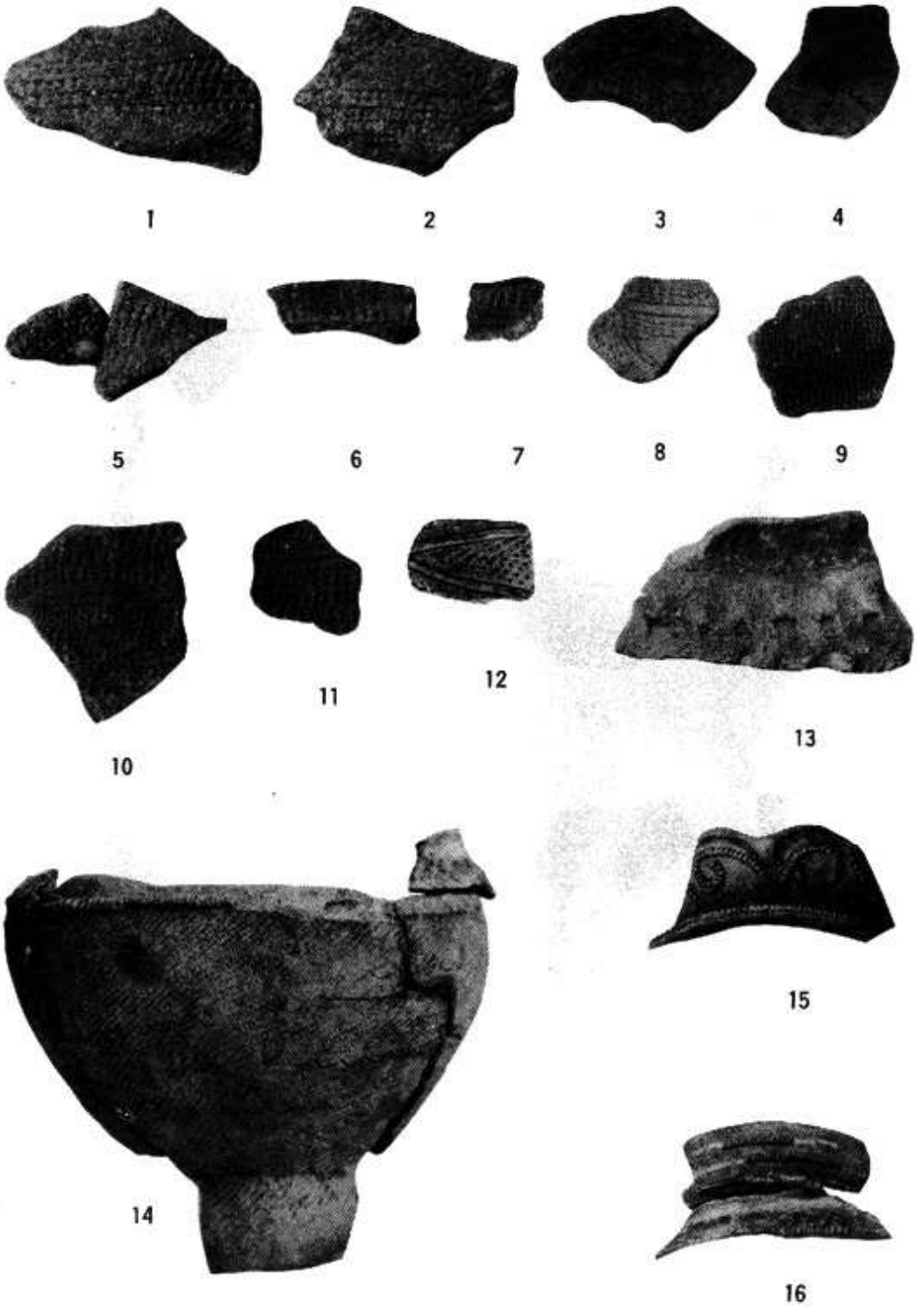
2．第２号住居炉跡

3．第２号住居床面出土の土器

図版２



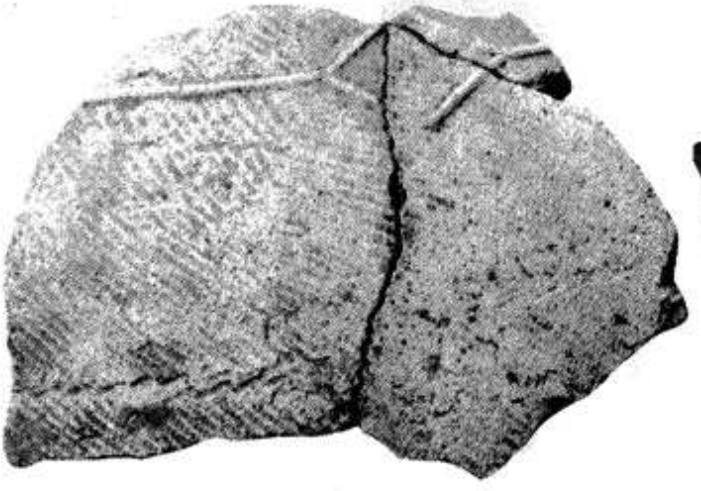
図版 3　縄文時代前期の土器



図版 4　縄文時代前期の土器

1

2



3

4

5

6

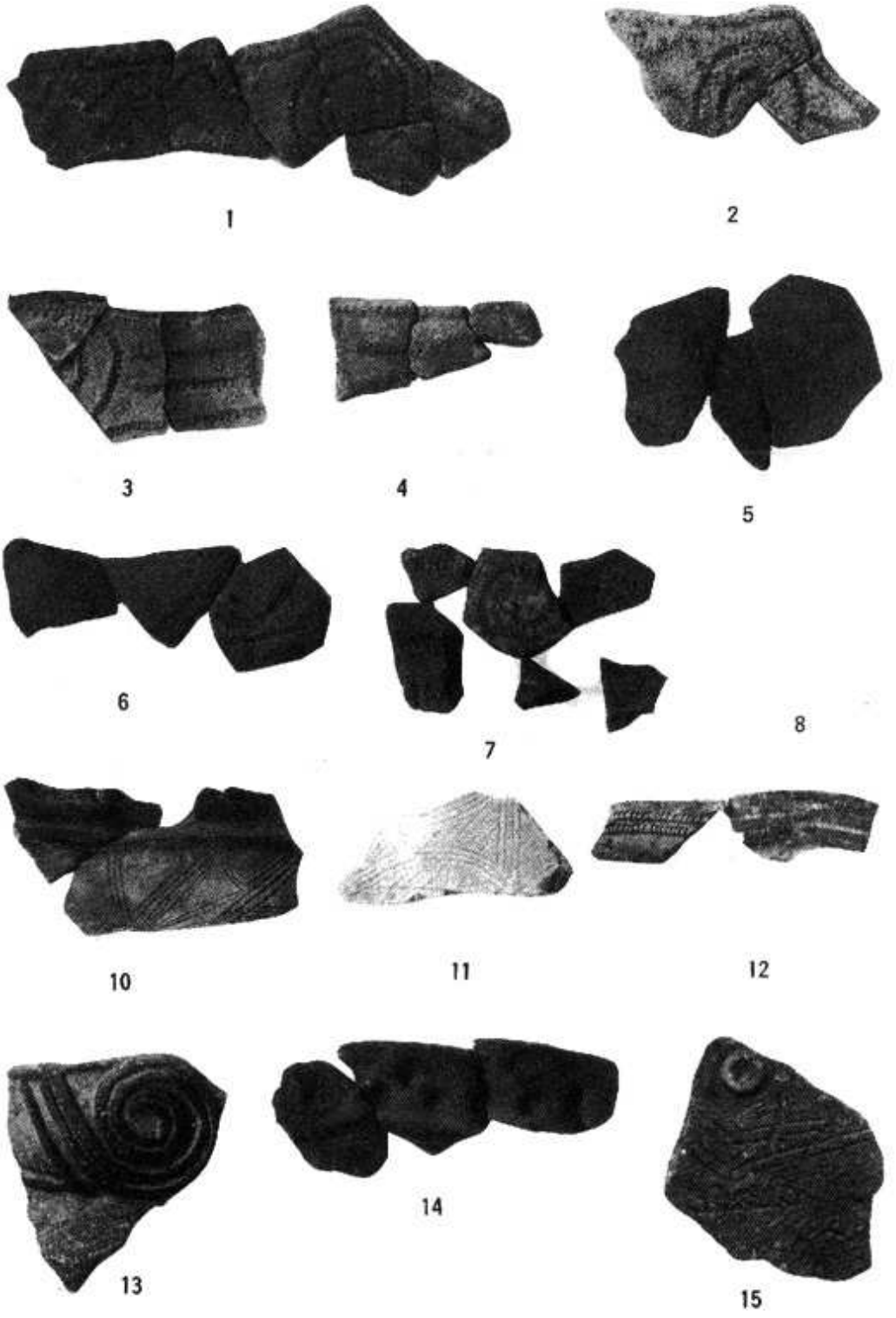
7

8

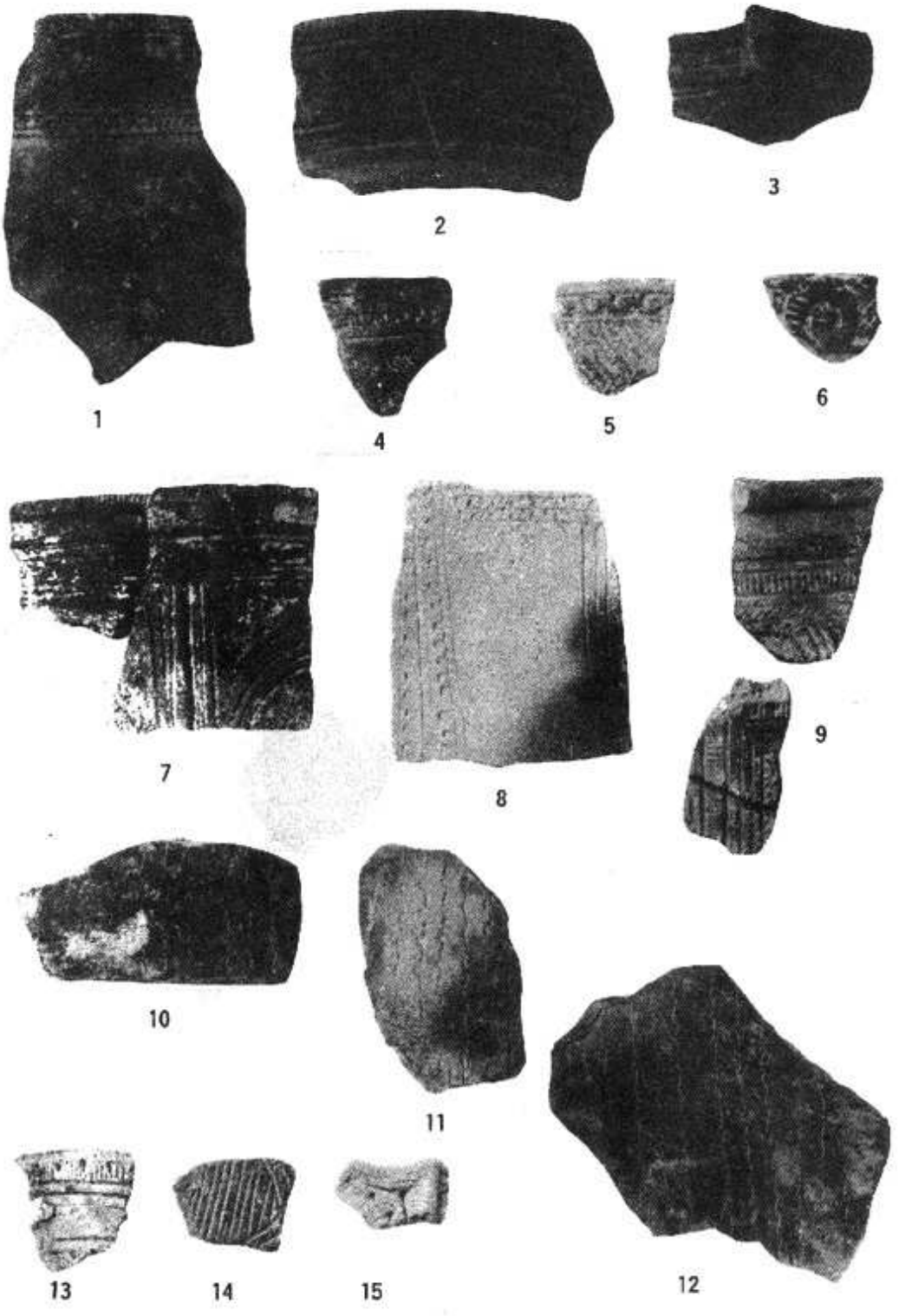
9

10

図版５　縄文時代前期の土器



図版 6　縄文時代前期の土器



図版７　縄文時代中期の土器

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

図版 8　縄文時代中期の土器

福島県文化財調査報告書第68集
福島県　塩川町

上ノ台遺跡 発掘調査概報

昭和53年12月25日
編集・福島県教育庁文化課
発行・福島県教育委員会
（〒960）福島市杉妻町2-16